

II. 遺跡調査の概要

ごんろく
権六遺跡

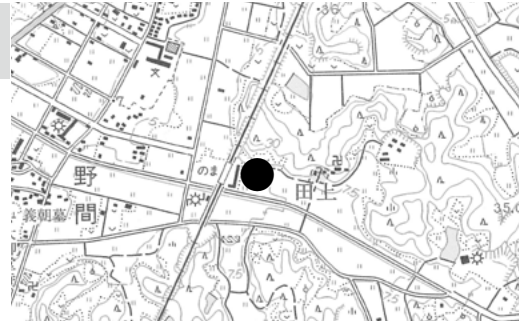
所在地 知多郡美浜町大字野間字権六地内
(北緯34度46分25秒 東経136度51分44秒)

調査理由 県道野間河和線

調査期間 平成26年10月～平成27年3月

調査面積 2,400㎡

担当者 蔭山誠一



調査地点 (1/2.5万「野間」)

調査の経過 発掘調査は、県道野間河和線の建設工事に伴う事前調査として、愛知県土木部道路建設課知多建設事務所より愛知県教育委員会を通じた委託事業として行った。

立地と環境 本遺跡は美浜町の南西側に位置する遺跡で、名鉄野間駅の東北東約100mにある。遺跡の立地は、知多半島の伊勢湾側にある丘陵の南側裾部に立地する。遺構検出面の標高は4.5mから7.0m前後で、調査区内の東西に2ヶ所の谷地形がみられる。調査区の中央付近の丘陵上には、美浜町の町指定史跡である千人塚がある。

調査の概要 調査区は名鉄野間駅のある西側から東側へ14A区～14D区の4調査区を設定し、西から東に順次調査を実施した。基本層位は地表より深さ0.5m～1.0mに表土(腐植土)層とその下にある近年の整地・盛土層が、その下にて近世後半以後の主に水田などに伴う造成とその整地・盛土層が0.2m～1.0m程あり、その下に中世以後の遺構や遺物包含層が基盤層の上に堆積していた。遺構の検出は、近世後半以後の整地・盛土層上面とその下面にて行った。

まとめ その結果、中世の掘立柱建物1棟、竪穴建物1棟、柱穴列4列以上、溝10条、土坑・柱穴多数、江戸時代後期以後の井戸2基、溝2条、土坑多数と古墳時代前期後半から江戸時代にかけての出土遺物が確認できた。

今回の発掘調査によりみつかった遺構と出土遺物は、平安時代末～鎌倉時代前半に中心があり、調査地点の北にある史跡千人塚の伝承の時代と対応している。今後、この地域の歴史を考える上で、貴重な成果になるものと思われる。

(蔭山誠一)

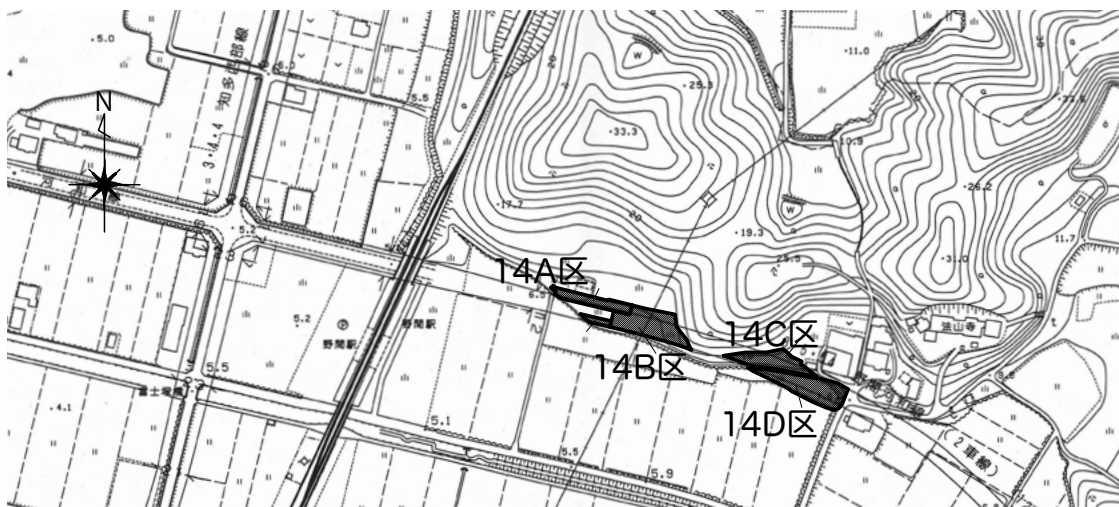


図1 調査区位置図 (1:5,000)



14A区全景 (西より)



14B区全景 (西北西より)

かんがくいん

勸学院跡(範囲確認調査)

所在地 蒲郡市清田町木森・西観嶽地内
(北緯34度50分39秒 東経137度14分30秒)

調査理由 一般国道 23 号名豊バイパス

調査期間 平成 26 年 5 月

調査面積 100㎡

担当者 永井宏幸



調査地点 (1/2.5万「幸田」)

調査の経過 調査は国土交通省による一般国道23号名豊バイパス建設に伴う事前調査として、愛知県教育委員会の委託を受けて平成26年5月に実施した。調査対象地は丘陵端部にあり、現況は旧果樹園などで、周辺には蜜柑の果樹園がひろがる。県教育委員会の有無確認調査の結果を受け、2×3m、1×2mの試掘坑を中心に総数26カ所を設定した。

立地と環境 勸学院跡は三河国司であった大江定基(寂照)の子孫定厳が建立したと伝承のある平安時代の寺跡である。遺跡に南接する石山神社周辺の造成により、山茶碗や土師器が出土している。また、東方に隣接して6世紀代の円墳である権現山古墳が所在する。調査対象地付近の標高は55～73mである。

調査の概要 寺院跡の包蔵地として知られていた遺跡であったが、発掘調査による成果はなかった。寺院跡が存在するとすれば、丘陵端および山腹にあたる地区に寺域が点在する可能性もあり、現況で平坦面の確認できる箇所を中心に試掘坑を設定した。調査の結果、全26カ所の試掘坑において遺構は確認できなかった。石山神社に近い試掘坑(T.T.01)から弥生～古墳時代の土器片が1点出土した。これ以外に遺物の出土はなかった。

ま と め 調査対象地のほとんどが、近代以降に谷底を埋め造成された水田やその後果樹園の造成により地形を改変していることが調査によりわかった。今回の確認調査では寺院跡に関わる遺構と遺物は確認できなかったが、石山神社に隣接する付近から山茶碗などがまわって出土していること、五輪塔、宝篋印塔など墓地に関わる石造物が付近に点在していることを付記しておく。

(永井宏幸)



調査風景



T.T.01 完掘状況

しもかけ
下懸遺跡

所在地 安城市小川町
(北緯34度54分20秒 東経137度05分43秒)

調査理由 床上浸水対策特別緊急事業(鹿乗川)

調査期間 平成26年5月～平成26年6月

調査面積 210 m²

担当者 酒井俊彦



調査地点(1/2.5万「西尾」)

調査の経過 調査は一般河川鹿乗川改修工事に伴い、愛知県建設部から愛知県教育委員会を通じて当センターが委託を受けて実施したものである。本遺跡は平成 12、21 年度と昨年度に鹿乗川導水路の東側と導水路と鹿乗川間の調査を行っている。今回を含めた総調査総面積は 7900 m²である。今年度は、導水路東側の調査を行った。

立地と環境 本遺跡は矢作川下流域、鹿乗川左岸の沖積地に立地する。右岸の碧海台地上には姫小川古墳などの古墳群が展開し、平成 12 年度より本センターが調査を行っている鹿乗川左岸には、北から南にかけて姫下、寄島、下懸、五反田、惣作の 5 遺跡が連続して所在する。鹿乗川は碧海台地東辺を南流し、川の西側の遺跡周辺は平坦な沖積地である。中世以前の鹿乗川は矢作川沖積地を蛇行して走り、本遺跡及び姫下、惣作、寄島で東西方向の旧河道が確認されている。遺跡はこの旧鹿乗川の自然堤防上に展開し、標高は 5～6m である。これまでの調査では弥生時代、古墳時代前期、古代および中世の遺構、遺物が検出されている。また、北西から南東方向に流下する古墳時代以前の旧河道が確認され、古墳時代前半の土器と木製品が出土している。

調査の概要 今年度の調査区は平成 21 年度および昨年度の調査範囲の未調査部分と昨年度の調査区の北に隣接した部分である。調査は前者に A・B、後者に C・D の 4 調査区を設定し、上下 2 面の調査を行った。上面は中世～近世の耕作土層下の古墳時代包含層である黒褐色土層面と部分的に基盤である灰色シルト面で遺構検出を行った。上面では遺構は検出されなかった。下面は基盤の灰色シルト層面で遺構を検出した。主な遺構として、古墳時代の溝群及び小土坑が検出された。溝群は幅 40cm、深さ 20cm 程度の溝が数条が平行して走り、当遺跡と北の寄島遺跡で認められる特徴的なものである。また、B 区で幅 3m で深さ 20cm ほどの東西方向の溝 1 条を確認した。平行して走る溝群の溝の遺物は極少量である。後者の溝はいままでの調査では見られない特徴のもので、古墳時代前半の土師器壺、甕、高杯が出土した。また、B 区で同時期の竪穴建物らしい落ち込みが検出されたが、攪乱によって大部分消失しているため確認できなかった。

ま と め 今年度の調査区 14C・14D は遺跡の北端である。調査の結果、少数の土坑のみが検出され、竪穴建物や掘立柱建物などの遺構は検出されず、集落域外であることが確認された。今後はこれまでの調査成果を踏まえ、北に隣接する寄島遺跡の関連性を検討することが課題である。

(酒井俊彦)



D区遺構完掘状況（北より）



C区遺構完掘状況（南より）



A・B区遺構完掘状況（北より）



調査区全景（南より）

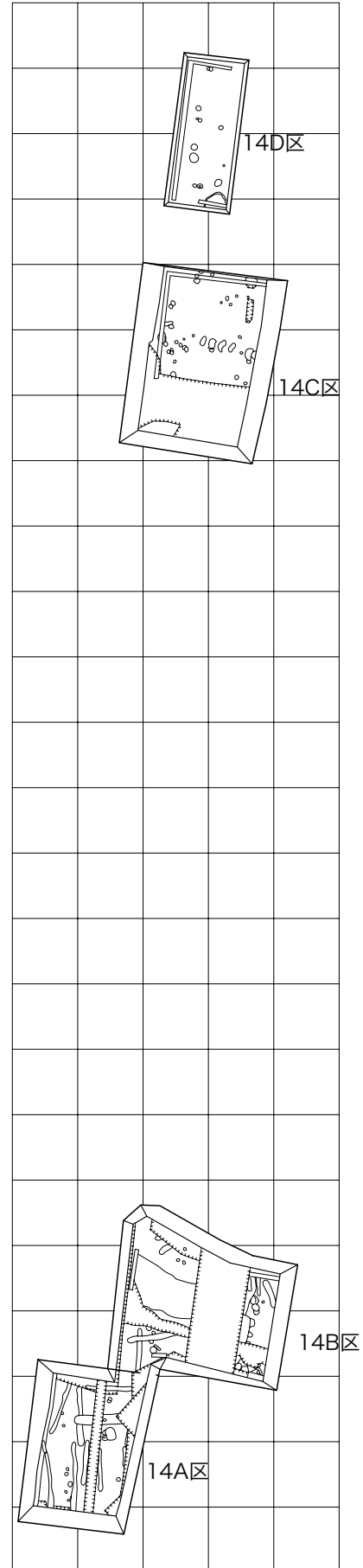


図1 遺構全体図（1:500）

よせじま
寄島遺跡

所在地 安城市小川町
(北緯34度54分34秒 東経137度05分45秒)

調査理由 中小河川改良事業(鹿乗川)

調査期間 平成26年6月～平成26年12月

調査面積 2,740 m²

担当者 酒井俊彦



調査地点(1/2.5万「西尾」)

調査の経過 調査は中小河川改良事業(鹿乗川)に伴い、愛知県建設部から愛知県教育委員会を通じて当センターが委託を受けて実施したものである。本遺跡は平成19年度から調査を開始し、今年度で5回目、総調査総面積は13,450m²である。今年度は、遺跡南部である平成19年度と23年度の調査区に隣接する道路部分と昨年度13B区の北側の調査を行った。前者にA～Dの4調査区を設定し、後者にE区を設定した。E区は遺跡北端にあたる。

立地と環境 本遺跡は矢作川下流域、鹿乗川左岸の沖積地に立地する。右岸の碧海台地上には姫小川古墳などの古墳群が展開し、平成12年度より本センターが調査を行っている鹿乗川左岸には、北から南にかけて姫下、寄島、下懸、五反田、惣作の5遺跡が連続して所在する。現在の鹿乗川は碧海台地東辺を直線的に南流し、川の西側の遺跡周辺は平坦な沖積地である。中世以前の鹿乗川は矢作川沖積地を蛇行して走り、下懸遺跡、惣作遺跡、姫下遺跡で東西方向の旧河道が確認されている。遺跡はこの旧河川の自然堤防上に展開する。標高は約7mである。これまで遺跡の南から調査を行った結果、古墳時代の集落、墓域が検出されている。

調査の概要 今年度A～D区では、これまでの調査で検出された古墳時代集落と墓域の展開の状況を確認することが主目的であった。遺跡の南端に相当するA区では遺跡の南を画する東西方向の古墳時代以前の時期の旧河道を確認し、南側の自然堤防上で下懸遺跡につながる堅穴建物2棟を検出した。自然河道の北側は墓域であり、平成19・23年度の調査で検出された、古墳の周溝と推定された方形に巡る溝の延長部分および方形周溝墓をA・B・D区で確認した。B区の北半とC区は集落域であり、堅穴建物群とこれに先行する時期の当遺跡に特徴的な平行して走る溝群が検出された。古墳時代以外の時期では、B区で中世の大形土坑が1基検出された。E区では、上面の遺構として中世の溝群、下面の遺構として古墳時代前半の堅穴建物群、溝群、土坑が検出された。中世の溝は南北方向の旧河道の堆積層の上層で河道と同方向に走るものと、自然堤防上で東西方向の幅広の浅いものが確認された。

まとめ 今年度E区では北に位置する姫下遺跡との境界部での遺構展開が問題となった。昨年度13B区では堅穴建物は検出されなかったが、E区では検出されたことにより集落が途切れながらさらに北に広がることが確認された。また、平行して走る溝群が検出されたことにより、当遺跡の特徴的な遺構のあり方も確認された。今後は姫下遺跡の遺構群との関係が検討課題となる。

(酒井俊彦)



A～D区全景 (北より)



E区全景 (南より)

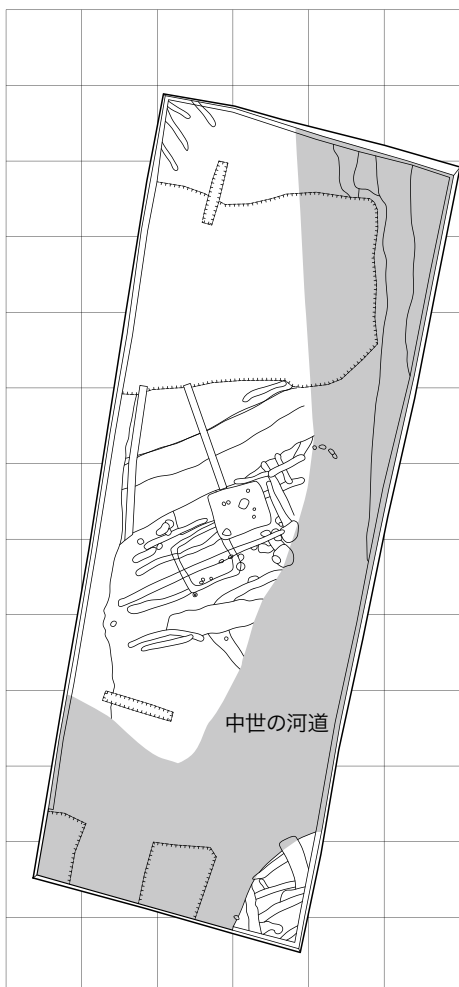


図2 E区遺構全体図 (1:500)

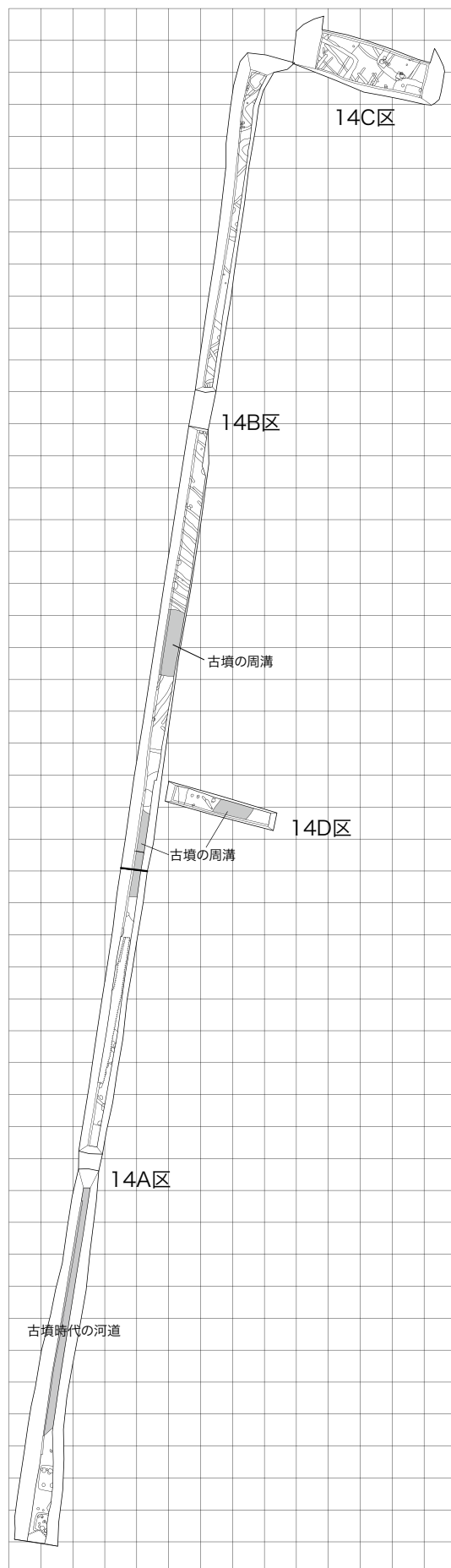


図1 A～D区遺構全体図 (1:1,000)

ひめした
姫下遺跡

所在地 安城市小川町
(北緯34度54分52秒 東経137度05分49秒)

調査理由 中小河川改良事業(鹿乗川)

調査期間 平成26年12月～平成27年3月

調査面積 1,200㎡

担当者 酒井俊彦



調査地点(1/2.5万「西尾」)

調査の経過 調査は中小河川改良事業(鹿乗川)に伴い、愛知県建設部から愛知県教育委員会を通じて当センターが委託を受けて実施したものである。本遺跡は平成17・18年度に調査を行い、今年度で3回目、総調査総面積は8620㎡である。今年度は、平成18年度の06C区の南側の調査を行った。

立地と環境 本遺跡は矢作川下流域、鹿乗川左岸の沖積地に立地する。平成12年度より本センターが調査を行っている鹿乗川左岸には、北から南にかけて姫下、寄島、下懸、五反田、惣作の5遺跡が連続して所在する。遺跡の西方の鹿乗川右岸の碧海台地上には前方後円墳である姫小川古墳があり、この時期の古墳群が展開する。現在の鹿乗川は碧海台地東辺を南流し、川の西側の遺跡周辺は平坦な沖積地である。中世以前の鹿乗川は矢作川沖積地を蛇行して走り、下懸遺跡、惣作遺跡、姫下遺跡で東西方向の旧河道が確認されている。遺跡はこの旧河川の自然堤防上に展開する。標高は約7mである。これまでの調査で弥生時代中期、古墳時代前～中期、平安時代の集落が確認されている。今年度の調査区の北に隣接する06C区では北東から南西に走る古墳時代前期以前の旧河道が検出されている。この北側に平安時代の竪穴建物からなる集落が展開する。今年度の調査区に連続する旧河道の南側では古墳時代前期の遺構群が確認された。

調査の概要 調査は上下二面で行った。現代の耕作土直下の古墳時代から古代の包含層である黒褐色土層面で上面遺構を検出し、この下層の基盤面で下面の遺構を検出した。上面では主な遺構として、江戸時代後半の東西および南北方向に直線的にはしる溝3条と大形土坑1基が検出された。遺構からは瀬戸窯産施釉陶器、土師器鍋、常滑窯産甕が出土した。下面では古墳時代後半～奈良時代および古墳時代前半の遺構が確認された。前者の遺構では北西から南東に走る溝が検出された。古墳時代前半の遺構として、竪穴建物、掘立柱建物、土坑、溝が検出された。遺存状況は悪く、竪穴建物11棟、掘立柱建物3棟が確認された。溝は幅30cm程度で数条平行して走るものである。古墳時代後半から奈良時代の遺構からは、須恵器、土師器が少量出土した。

まとめ 本遺跡の南を画すると推定される旧河道が06C区にあり、この南側において遺跡の広がりを確認することが今年度の課題であった。調査の結果、古墳時代集落が展開し、少数の古代の遺構も検出された。また、古墳時代の平行して走る溝群は、南に隣接する寄島遺跡の遺構と類似するものである。自然地形の関連を考慮して、古墳時代から古代にかけての遺跡の展開を検討する必要がある。

(酒井俊彦)



上面遺構検出状況



近世土坑検出状況



上面遺構完掘状況



上面遺構完掘状況（南より）



下面竪穴建物群検出状況



下面遺構検出状況（南より）



下面遺構検出状況（西より）



遺跡全景（南より）

くりはざま
栗狭間遺跡

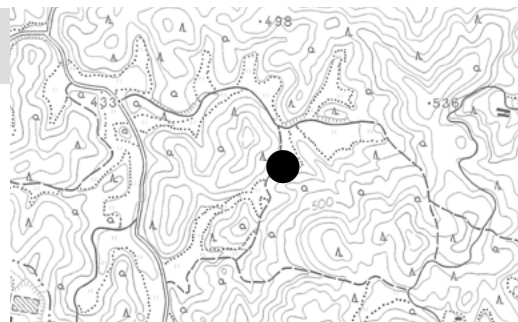
所在地 豊田市下山田代町栗狭間地内
(北緯35度02分28秒 東経137度32分52秒)

調査理由 豊田・岡崎地区研究開発施設用地造成事業

調査期間 平成26年5月～平成27年2月

調査面積 10,050㎡

担当者 武部真木・町田義哉・鈴木恵介



調査地点 (1/2.5万「東大沼」)

調査の経過 調査は愛知県企業庁による豊田・岡崎地区研究開発施設用地造成事業に伴う事前調査として、愛知県教育委員会の委託を受けて平成26年5月から平成27年2月にかけて実施した。調査対象地の現況は旧耕作地と植林された山林であり、地形に応じて14A区・14B区・14C区に分けて調査を行った。今年度の調査面積は合計で10,050㎡である。

立地と環境 栗狭間遺跡は郡界川の支流の一つである沖川の東岸丘陵部に位置する。遺跡は、周囲を緩斜面に囲まれた盆地状の地形であり北側に谷が開口している。谷を挟んで東に鶴ヶ池遺跡、北側の尾根上から谷にかけてに丸山遺跡と孫田遺跡が存在しており、縄文時代の遺物散布地と平安時代の遺跡群が展開している。

調査の概要 遺跡は、北向きの緩斜面 (14A区) と東向きに開口する東西方向の谷と周囲の緩斜面 (14B区)、南側には東西方向の小谷に隔てられた尾根先端の西向き緩斜面 (14C区) に分かれる。14A・B区間の盆地状の平坦地は南北方向に伸び、広いところで幅70m、狭隘部で幅20m程である。調査地点の標高は460～471mを測る。

調査の結果、縄文時代と平安時代の遺構や遺物が確認されており、特に平安時代について良好な資料が得られた。平安時代の遺構は地表面直下の黄褐色土層上面にて検出され、同時に黄褐色土層は縄文時代晩期の包含層でもあった。

縄文時代 14A区では上述の黄褐色土層から縄文時代晩期の条痕文土器が多く出土したが、縄文時代を通じて、陥穴以外に明確な遺構は確認し得ていない。14B・C区においては、同様の黄褐色土層から条痕文土器・石器の出土はあるものの、14A区に比較すれば出土量は少ない。現在埋没している小規模な谷地形には黒色土が堆積し、14A区では層中からわずか1点ながら押型文土器の破片が確認されている。黒色土除去後の地山面では陥穴を計11基確認した。なお14B区斜面部の地山面には凝集した広域火山灰を数点確認しているが、黒色土中には確認できていない。黒色土は火山灰の堆積後に新たに堆積した可能性を考えたい。

平安時代 14A・B区では、平安時代後期 (K-90～O-53号窯式期) の灰釉陶器碗、土師質甕を伴う竪穴状遺構が計8棟確認された。多くが板状の花崗岩を側壁として利用するカマドを傾斜の上位側に配置していることから方位は一定ではない。竪穴状遺構の残存状態は、斜面上位に位置するカマド側が残り、傾斜の下位に位置する反対側が欠損することが多い。竪穴内のカマド右側の竪穴側壁に接する位置に土坑が掘削される場合が多く、遺物の多くはこの土坑か、カマド周辺に散乱している状況での検出である。竪穴状遺構 (060SI) では土師質甕がカマド右側に正位に据えられた状態で検出されている。210SIは一部が欠損するものの床面の残存状況は良く、北辺と東辺それぞれにカマドが配置されている点で特徴的である。このうち東辺のカマド240SLは南側の側壁をなす花崗岩が抜きとられているため、同時に

機能していたとは考えられない。床面は貼床が施されるものの、上記2基のカマド跡との対応状況は明確ではなく、床面を再構築した手がかりは見られない。

他には、竪穴状遺構に近接、あるいは竪穴状遺構内に構築される炉跡がある。前者の例では090SIと111SL、235SIと077・083SL、後者は140SIと190SLである。いずれも炉跡周辺で鍛冶滓が出土するため、炉は鍛冶を目的として構築され、竪穴状遺構はこれに関連する可能性がある。特に235SIは、近隣の炉077SL・083SLとの距離が約6mと離れているにも関わらず、竪穴状遺構の上層から下層にいたるまで鍛冶滓が含まれることから、併存していたと考えたい。後述する200SB内にも169SLが属するが前後関係は不明確である。

中世では、掘立柱建物跡200SBがある。14B区の谷部上位斜面を切り出す形で平坦面が造成され、確認できるのは3間×2間の1棟だが、周辺にはさらに多数の柱坑があることから立て替えや柵の設置が行われた可能性がある。造成された平坦面の埋土からは尾張・瀬戸編年7～8形式の陶器(山茶碗)が出土し、200SBの柱坑からは灰釉陶器破片が確認された。

まとめ 今回の調査では、平安時代後半・鎌倉時代末の2時期の遺構・遺物が確認され、縄文時代の遺物が出土した。特に平安時代後半の遺構面と縄文時代晩期(馬見塚式期)の遺物包含層を明確に確認できた。また竪穴状遺構には鍛冶炉や鍛冶滓との関連をうかがわせるものがあり、竪穴状遺構の用途を考慮するための重要な資料となり得る。

竪穴状遺構群とは時期・立地を異にする掘立柱建物は、古代と中世では山間地の利用方法が異なる、あるいは環境が変化していることを示唆しているものと考えられる。

(鈴木恵介)



栗狭間遺跡 調査区遠景 (南から)



14B区210SI(南から)



14B区215SL(南から)



14B区出土墨書灰釉陶器「本」

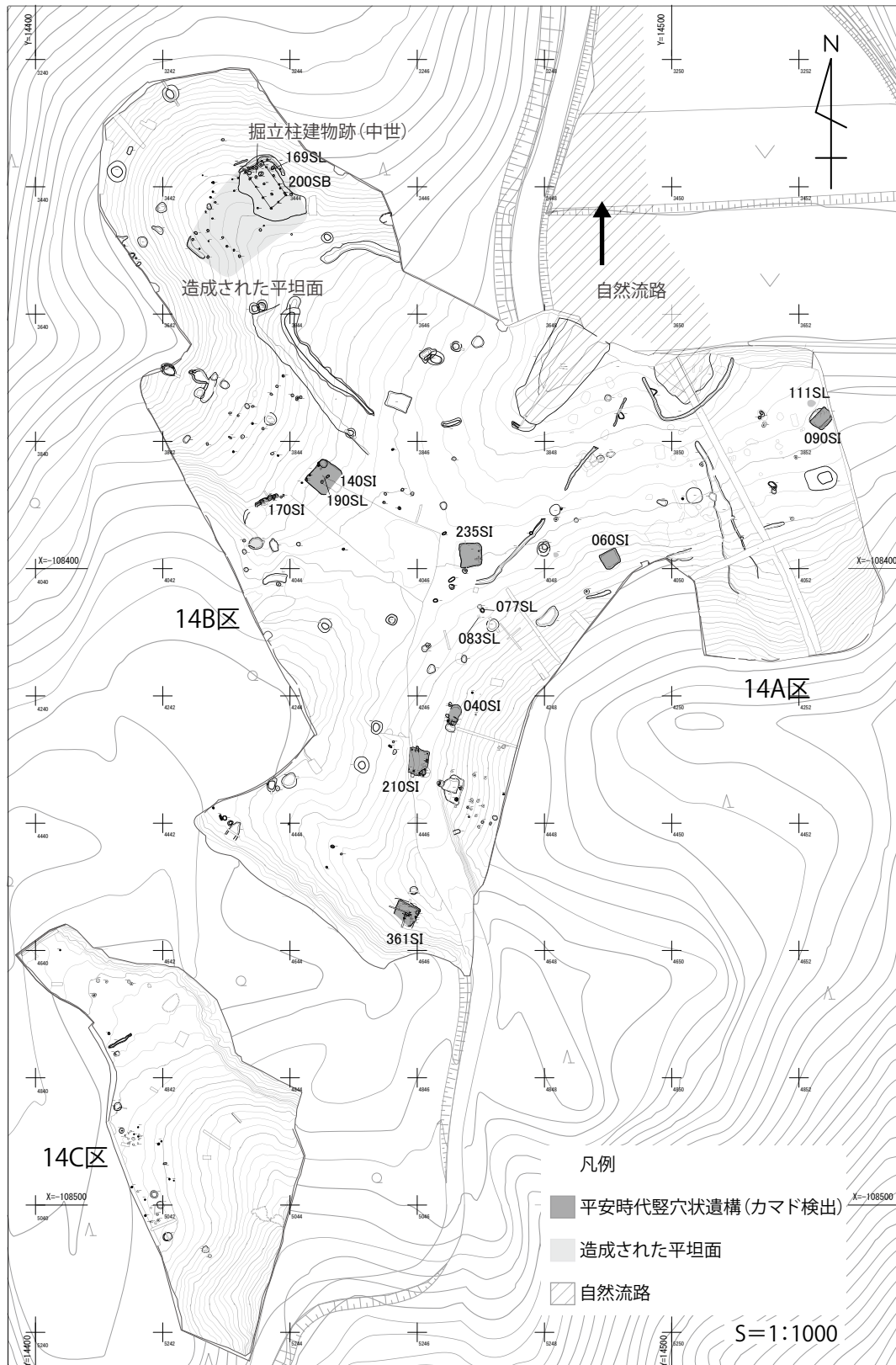


図1 第1面遺構全体図(1:1,000)

ぞうひら
蔵平遺跡

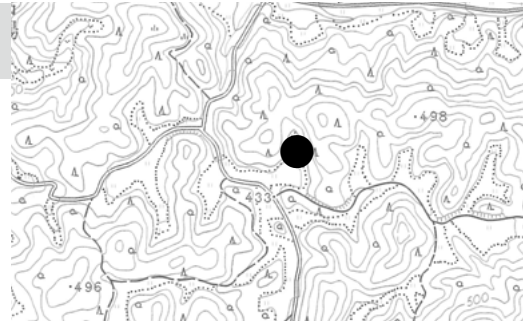
所在地 豊田市下山田代町蔵平地内
(北緯35度01分34秒 東経137度19分15秒)

調査理由 豊田・岡崎地区研究開発施設用地造成事業

調査期間 平成26年5月～平成26年9月

調査面積 2,400㎡

担当者 武部真木・町田義哉



調査地点 (1/2.5万「東大沼」)

調査の経過 調査は愛知県企業庁による豊田・岡崎地区研究開発施設用地造成事業に伴う事前調査として、愛知県教育委員会の委託を受けて平成26年5月から9月にかけて実施した。調査対象地の現況は旧水田耕作地と植林された山林であり、谷を挟んで14A区と14B区とに分けて調査を行った。両区を合わせた調査面積は2,400㎡である。

立地と環境 蔵平遺跡は郡界川の支流の一つである沖川の東岸丘陵部に所在し、南北に伸びる谷地形の東・西斜面に位置する。北側上流の谷斜面に和倉遺跡、尾根を挟んで東に孫石遺跡、更に谷を挟んで丸山A遺跡が存在しており、周辺には平安時代を中心とした遺跡群が展開している。

調査の概要 遺跡が所在する斜面は谷を挟んで西向き斜面(14A区)と東向き斜面(14B区)に分かれる。調査地点の標高はおおよそ442～455m、斜面の平均斜度はそれぞれ14A区は約17°、14B区は約22°を測る。

調査の結果、主に14A区から縄文時代の遺物、平安時代の遺構や遺物、近代の炭焼窯が確認されている。

堆積層は斜面のため、一概には同一とは言えないかもしれないが、表土(腐葉土混)下の黄灰色土と少量の炭化物が混じり、しまりを欠く黄褐色土を平安時代の遺物包含層として捉え、その下のしまりのある黄褐色土層(地山)上面を検出面として、14A・B区共に1面調査を行なった。また、一部の竪穴状遺構上には黒褐色土が堆積しており、周辺の遺跡では下層で確認されている黒褐色土の再堆積である可能性がある。

以下、時期ごとに遺構・遺物の概要を報告する。

縄文時代 縄文時代の遺物としては、スクレイパー1点が西向き斜面のA区包含層から、出土しているに過ぎない。遺構としては捉えられるものは確認されなかった。

平安時代 14A区からは、竪穴状遺構10基、カマド・炉跡15基の他に、それらに伴う柱穴や土坑、溝などの遺構が多数確認された。

竪穴状遺構は斜面を切り出して平坦面が造られており、一辺が2～3mと小規模なものが多いが、標高454m付近に位置する最大規模の009SXは3基の炉跡、6基の柱穴、2基の土坑を伴い、長辺は約7.5mを測る。また山側の壁面に沿って小柱穴3基を伴う、長さ約3mの溝を確認した。標高452mに位置する石組みカマドを伴う小規模な024SXは、ほとんどの竪穴状遺構が現況において斜面の山側にしか掘り方がないのに対して、谷側にも掘り方が確認された。標高446～448m付近に造り出された平坦面には、竪穴状遺構が弧状に連なって南北に展開しており、そこだけで8基の炉跡が確認されている。最下段、標高442m付近に位置する122SKは他の竪穴状遺構とは違い炉跡や溝を伴わないが炭化材が検出さ

れ、焼失竪穴建物の可能性がある。

明確なカマドは石組みのものが1基確認されたのみだが、009SXの山側東壁に近接する034SLは壁際に煙道のような被熱部分があり、カマドであった可能性も考えられる。また、弧状平坦面の一角、166SX内の石組みがわずかに残る045SLは壁から離れた位置にあり、石組みの炉であった可能性もある。

竪穴状遺構の大半は規模が小さく、カマド・炉の配置からも長期居住には適さないかもしれない。季節限定の作業場として機能していた可能性も検討しなければならないだろう。

遺物に関しては、竪穴状遺構や包含層から多数の灰釉陶器が出土している。そのうち、墨書を有する碗、皿合わせて12点以上、ほかに緑釉陶器碗1点も出土している。また、それ以外に18点に及ぶ土錘が出土している。大半が谷に近い標高の低い位置からではなく、斜面の比較的高い所から出土しているのが興味深い。本遺跡においては炉跡周辺を含めて、鍛冶滓などの鍛冶関連遺物の出土は極めて少なかったが、急斜面であることを合わせて考えると一概に関連遺構はなかったとは言い切れないかもしれない。

近代 近代では炭焼窯が確認されている。本遺跡では炭焼窯は壁面に被熱を受けて赤変した部分が残るが円形土坑のタイプと平面形が涙滴形を呈する焚口と煙道を持つタイプが確認された。007SYは石材を組んで造られた焚口をと煙道を持ち、窯体内には天井壁が崩落し、焚口前方は約3m×約5mの平坦な作業スペースに整地され、灰原が広がっていた。

まとめ 今回の調査では、平安時代の竪穴状遺構が数多く確認されたが、その規模、配置、立地条件などから、定住していたとは考えにくい。墨書の灰釉陶器の出土量の多さから、どのような勢力が介在していたのかを検討する必要があるだろう。また、これまで余り着目されていなかった山間部の急斜面に数多くの遺構が確認されたことの意義も大きい。今後は近在する遺跡群と比較して、この地域全体の様相を把握し、蔵平遺跡の担う役割を考えていかねばならないだろう。

(町田義哉)



蔵平遺跡 調査区遠景 (南から、手前：蔵平遺跡、奥：和倉遺跡)

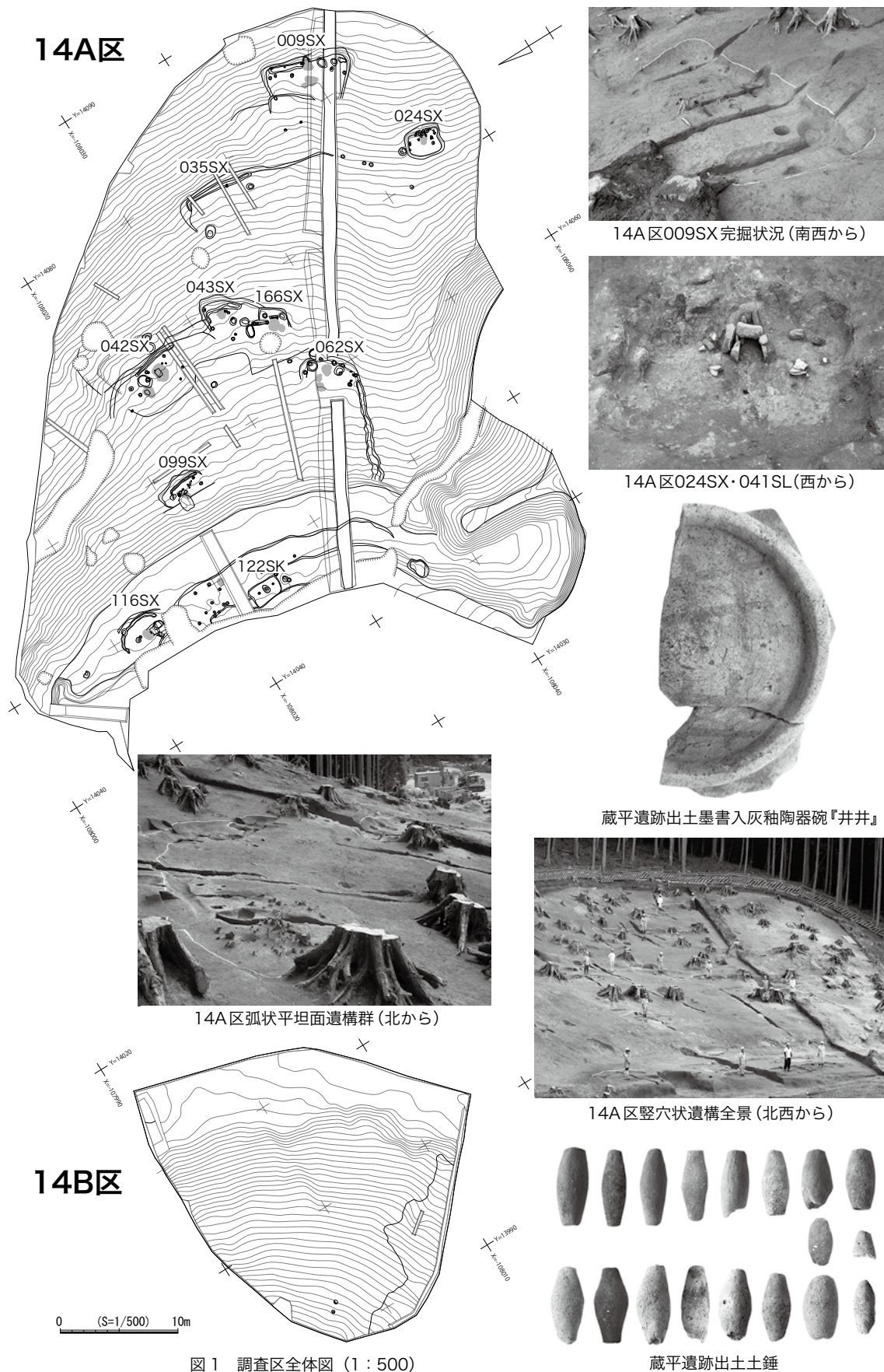


図1 調査区全体図(1:500)

ひがしこざき
東小笹遺跡

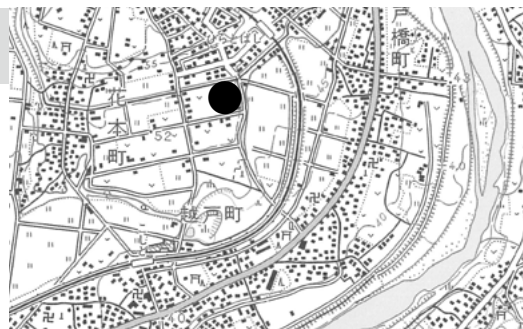
所在地 豊田市越戸町東小笹・西小笹
(北緯35度06分46秒 東経137度11分00秒)

調査理由 国道153号線豊田北バイパス建設

調査期間 平成26年5月～平成26年10月

調査面積 2,000㎡・範囲確認調査100㎡

担当者 早野浩二



調査地点 (1/2.5万「豊田北部」)

調査の経過 発掘調査は国道153号線豊田北バイパス建設に伴う事前調査として、国土交通省中部地方整備局名四国道事務所から愛知県教育委員会を通じた委託を受けて実施した。

立地と環境 東小笹遺跡は矢作川右岸の低位段丘(越戸面)東端に立地する。遺跡は愛知県教育委員会による試掘調査の結果、新規に登録された。遺跡南端は東小笹塚状遺構として登録され、遺跡には真言宗宝隆院境内が含まれていた可能性も想定されている。段丘南端には小笹古墳、上位の段丘(碧海面)には宇津木A遺跡、宇津木B遺跡、宇津木古墳が立地する。

範囲確認調査 範囲確認調査は遺跡範囲西側の調査対象地に計32地点の試掘坑を設定した。調査の結果、溝や土坑等の遺構が確認されたが、多くは旧水田に関する遺構である。縄文時代の打製石斧、古代、中世、近世以降の土器・陶磁器もわずかに出土したが、いずれも耕作土に伴う小片で、遺跡の存在を積極的に示すものではなかった。

発掘調査 発掘調査は段丘東端に調査区を設定した。調査の結果、時期や性格が明確な遺構は検出されず、調査区南東から南西の一部に低位面(籠川面)方向に傾斜する段丘斜面を確認した。調査区の大部分は基盤層が露呈し、遺跡は相当に削剥されていることが推察される。段丘斜面の堆積層は古墳時代以降の土師器、須恵器、灰釉陶器、中世陶器を少量包含するが、近世以降の陶器、瓦も混在する。古墳時代後期の鉄鏃も出土した。なお、宝隆院に関連する遺構・遺物は検出されなかった。

まとめ 今回の範囲確認調査、発掘調査の結果、遺跡の存在を積極的に示す遺構・遺物は検出されなかった。改めて範囲確認調査を実施し、遺跡の範囲をより正確に把握する必要がある。

(早野浩二)



図1 東小笹遺跡 調査区配置図 (1:2,500)

まんぜ
万瀬遺跡

所在地 北設楽郡設楽町川向字マンゼ
(北緯35度09分44秒 東経137度33分54秒)

調査理由 設楽ダム

調査期間 平成26年6月～10月

調査面積 2,050㎡

担当者 鈴木正貴・川添和暁



調査地点(1/2.5万「田口」)

調査の経過 調査は、国土交通省中部地方整備局設楽ダム工事事務所による設楽ダム工事関連事業として、国土交通省から愛知県教育委員会の委託を受けて平成26年6月から10月にかけて実施した。調査対象地の現況は旧耕作地などの山麓斜面であり、調査面積は2050㎡である。

立地と環境 万瀬遺跡は豊川支流の一つである境川右岸に所在し、山麓の東向き緩斜面に立地する。国道257号線設楽大橋の北西に位置する。これまでに愛知県教育委員会による詳細遺跡分布調査と愛知県埋蔵文化財センターによる範囲確認調査により、縄文時代から戦国時代までの遺物が採取されている。今年度の調査区は県道432号小松田口線よりも東側の区域に設定した。

調査の概要 調査区西部を中心に近現代の盛土や石垣があり、これを除去するとやや急な斜面に黒褐色土が堆積していることが判明した。調査はこの黒褐色土の堆積を中心に行い、縄文時代の土器と石器、鎌倉時代の竪穴状遺構や鍛冶炉、江戸時代の柱穴や土坑などが発見された。

縄文時代 北西部の斜面上位では傾斜がやや緩くなっており、この部分を中心に縄文時代の土器や石器がまとまって出土した。縄文土器には縄文時代後期中葉から縄文時代晩期の注口土器や深鉢などがあり、石器には磨石や敲石などが存在する。石器の中では、特に打製石斧が比較的多く認められる特徴がある。遺構については、当初は該期の遺物を多数含む集石遺構6基が縄文時代のものとみられたが、最終的に中世以降の所産であることが確定し、今回の調査では明確に縄文時代の遺構と認定できるものは存在しない。遺物の分布状況からみて、調査区北側の緩斜面付近に縄文時代の遺構が展開するものと思われる。

鎌倉時代 調査区北西端で緩斜面から平坦面を切り開いた竪穴状遺構043 S Iが1基検出された。2.2m以上×約3.0mの規模を持つ平坦面の南東部では炉跡013 S Lが存在し、その周辺で碗型鍛冶鉄滓や炭化物が出土しており、鍛冶炉跡と推定される。043 S I床面直上で山茶碗片が出土していることから、鎌倉時代後半の竪穴状遺構と考えられる。

江戸時代 江戸時代から近代にかけての遺構は、調査区全域に分布するが、特に西半部の造成面で多く検出された。遺構には井戸、炉跡、柱穴、土坑等がある。井戸は、調査区の北西端から南東端に向けて傾斜する谷地形の凹部が埋積された部分に6基(058 S E・059 S E・060 S E・051 S E・327 S E・328 S E)設置されており、全て円筒形に掘削された素掘り井戸であった。地形的に湧水しやすい場所に井戸が構築されたことがわかる。出土遺物はなく時期は不明である。柱穴は西部で多く検出されるが、掘立柱建物为数棟建つものと推定される。東部にも柱穴は散見されるが、掘立柱建物跡と復元できるものはなく、立地からみて杭列等が展開したものと考えられる。土坑にはいくつか方形プランとなるものが存在

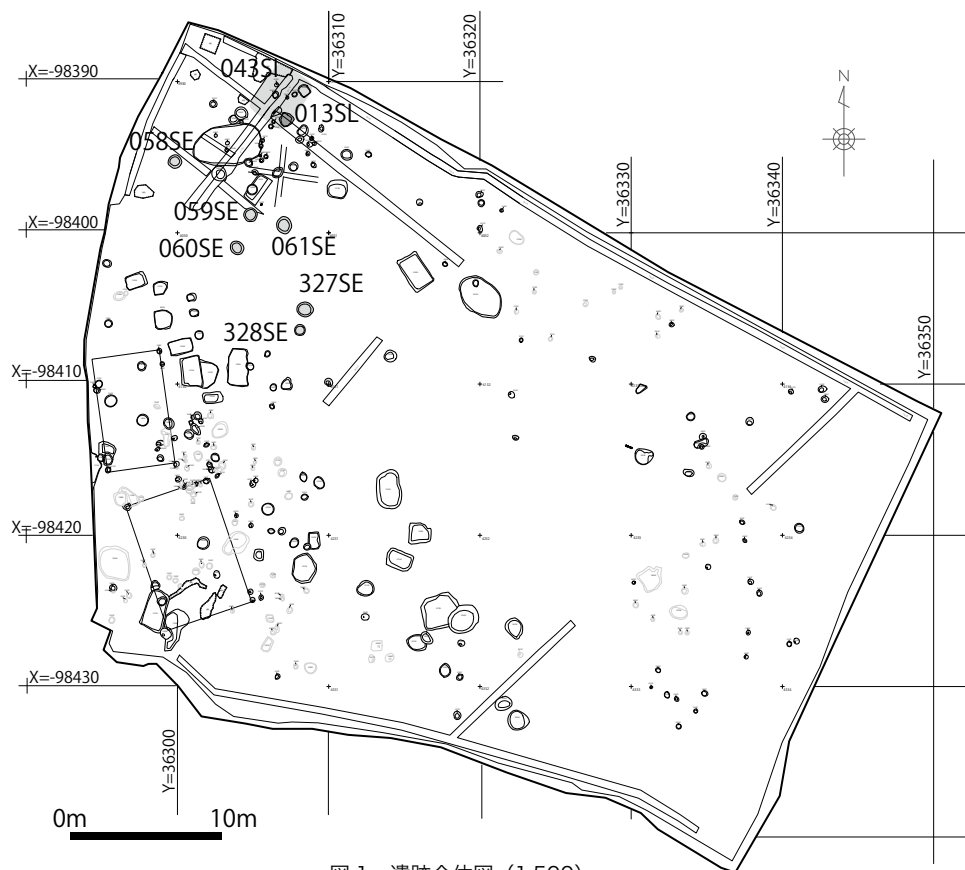


図1 遺跡全体図 (1:500)

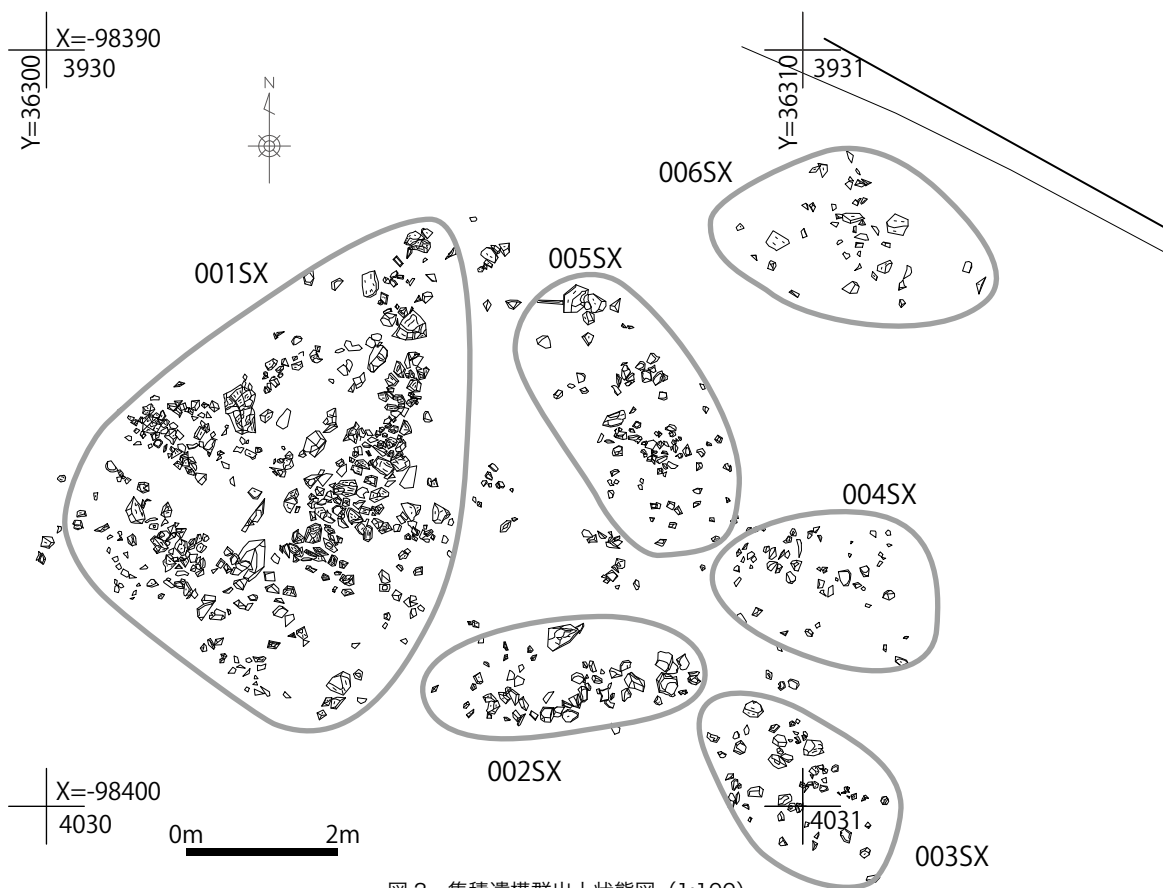


図2 集積遺構群出土状態図 (1:100)

するが、性格を特定するには至っていない。調査区北西部の集石遺構は、最下部から被熱痕と敲打痕が残存する台石が出土した。この台石は鍛冶作業などに伴う可能性が高く、集石は中世以降(おそらく江戸時代)に不要な石材を片付けたものではないだろうか。出土遺物には陶磁器・土器類があり、多くは江戸時代後期に属するが、一部に江戸時代初期まで遡るものも存在する。

ま と め 鎌倉時代の鍛冶作業場や江戸時代の屋敷跡などの遺構が確認され、近現代の万瀬集落の淵源がかなり遡ることが判明した。また、遺構は確認されなかったが、多くの縄文時代の遺物が出土しており、極めて近い場所に縄文時代の良好な遺構が残存している可能性が考えられる。今後の調査に期待したい。

(鈴木正貴)



遺跡遠景(北東から)



遺跡全体(東から)



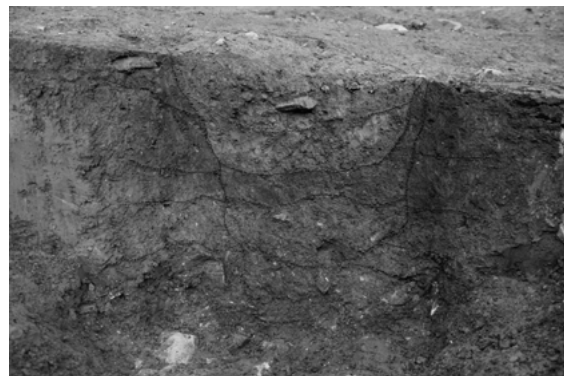
造成土と黒褐色土の堆積(西から)



柱穴・土坑群(北西から)



060SE 土層断面(東から)



328SE 土層断面(南から)



051SK土層断面(北東から)



043SI(左下に炉跡:南東から)



集積遺構群上面(南西から)



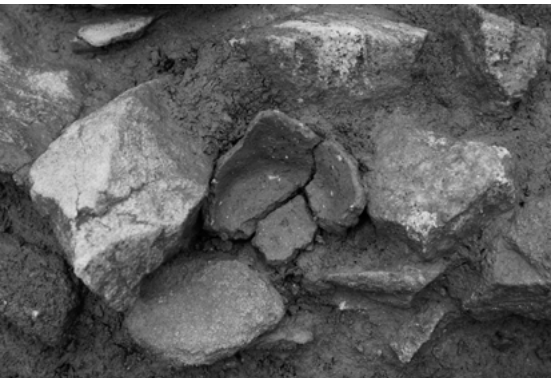
集積遺構群最下面(東から)



打製石斧出土状況(南東から)



注口土器出土状況(北から)



土器出土状況(西から)



打製石斧出土状況(北から)

にしち ひがしち
西地・東地遺跡

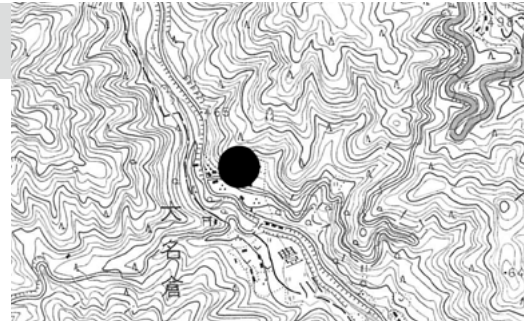
所在地 北設楽郡設楽町大名倉字西地、東地
(北緯35度6分41秒 東経137度32分37秒)

調査理由 設楽ダム

調査期間 平成26年5月～平成27年1月

調査面積 4,220㎡

担当者 鈴木正貴・川添和暁



調査地点(1/2.5万「田口」)

調査の経過 調査は、国土交通省中部地方整備局による設楽ダム工事関連事業に伴う事前調査として、愛知県教育委員会より委託を受けて、平成26年5月から平成27年1月にかけて実施した。調査面積は4,220㎡で、14A区・14B区・14C区の三調査区に分けて調査を行った。

立地と環境 遺跡は標高約450m、寒狭川左岸の山麓緩傾斜地および河岸段丘面上に立地する。当地は大名倉地区の北西端にあたり、寒狭川で開析された谷地形が開け始める地点に位置する。寒狭川の対岸側には、昭和43(1968)年、早稲田大学の調査により縄文時代後期の遺物が多く出土した、大名倉遺跡が位置する。

調査の概要 調査区東側にあたる14A区は、調査区外の北側から広がる谷地形中に位置する。表土下には、谷地形を埋める土石流堆積物が4m以上と厚く堆積しており、その上面で近世の埋葬遺構を2基検出した。谷地形脇の山側傾斜地には、近世以降のピット列が確認された。

14B区東側 調査区西側にあたる14B区は、北側から山側斜面が張り出す地点を境に、東側と西側とで様相が異なった。14A区で確認された谷地形は14B区東側まで続いており、山側傾斜地にはピット列を確認した。また、谷地形の落ち際には、近世の埋葬遺構が3基見つかり、キセル・火打石・寛永通宝とともに埋葬人骨が残存していた。

14B区西側 14B区西側では、縄文時代と近世前半以前の遺構・遺物が良好な状態で確認された。基本層序は、Ⅰ層：近現代の盛土(最大厚1m程度)、Ⅱ層：黒褐色粘土質シルト(近世前半以前：最大厚40cm程度)、Ⅲ層：褐灰色粘土質シルトおよび粘性の強い黒色粘土質シルト(縄文：最大厚40cm程度)、Ⅳ層：花こう岩礫の多い黒褐色あるいは黒色粘土質シルト(地山か)、Ⅴ層：黄褐色粘土質シルトおよび砂層(地山)である。

近世前半以前の遺構には、炉跡5基、竪穴状遺構2基以上、掘立柱建物などに関連するピット跡多数がある。炉跡および竪穴状遺構内および周辺では、鉄滓が出土するほか、被熱により著しく赤色化した台石(金床石か)や磨面の著しく発達した磨石(砥石?)も出土した。当地で野鍛冶などが行われた可能性も考えられる。その他、石積みの一部も確認した。

縄文時代の遺構は、Ⅱ層直下およびⅢ層中、あるいはⅣ層・Ⅴ層の直上で確認できた。検出された遺構には竪穴建物跡5棟、袋状土坑5基以上、単独の土器埋設遺構2基、その他土坑・ピット多数がある。これらの時期は縄文時代中期後半から後期初頭に属する。

調査区北西端の緩斜面に堆積する黒色粘土層中からは、縄文時代中期後半の竪穴建物跡が3棟確認された(1304SI・1305SI・1306SI)。いずれも石組内側で一辺約40cm四方の石囲炉跡が見つかり、1304SIおよび1305SIの炉跡内には大型土器片が敷かれていた。支柱穴および堀方も、一部ではあるが辛うじて検出できており、このことからいずれも一辺5m程度の隅丸方形のプランであったと推定される。

調査区南端で見つかった竪穴建物跡1263SIは、径4m程度の円形あるいは隅丸方形状を呈する。柱穴跡は壁柱を中心に見つかっており、中央には土器敷炉跡がある。竪穴建物跡の堀方南西端には、土器埋設遺構(埋甕)が1基確認された。この埋甕は後期初頭の深鉢が正位に埋設されたもので、口縁部上に蓋石が置かれ、底部には小穿孔が施されていた。

竪穴建物跡1201SIは、径5m程度の円形または隅丸方形状を呈する。この建物跡中央から北西寄りには、0.5×1mの範囲で長方形の石組があり、中央に土器敷炉跡があるとともに、南東脇には入子状で立位に設けられた深鉢が、北西端には大きな台石が据えられていた。台石と入子状の深鉢を含め、石組全体で一炉跡の機能を有していたと考えられる。

袋状土坑は、14B区西側中央付近に集中して認められた。これらは植物質食料の貯蔵穴であったことが考えられ、1208SKでは、埋土中に堅果類種実由来の炭化物粒がわずかに残存していた。036SKでは、土坑内に多量の後期初頭土器片および磨製石斧を包含しており、貯蔵穴としての利用後に廃棄あるいは埋納行為が行われたようである。

その他、単独の土器埋設遺構を2基検出した(1078SK・1286SK)。いずれも立位埋設で、底部は未穿孔で残存していた。1078SKは胴部下半のみが辛うじて残存している状態で時期は不詳である。一方、口縁部まで残存している1286SKは後期後葉に属する。

出土遺物 14B区の出土遺物には、縄文土器・石器、弥生時代の条痕文土器、灰釉陶器、中世および近世陶器(山茶碗・古瀬戸・天目茶碗・内耳鍋)や砥石が出土した。縄文土器は、中期後葉から後期前葉までが主体ではあるが、早期押形文(高山寺式)が最も古く、早期後半・前期後半・中期中葉(北屋敷式)なども若干出土した。石器では、石鏃・石匙・スクレイパー・打製石斧・磨製石斧・打欠石錘・切目石錘・有溝石錘・磨石・敲石類・石皿・台石類の出土をみた。剥片石器では黒曜石の使用が目立ち、剥片や法量の大きな石核の出土もあった。

14C区 14C区は調査区南西端にあたる。調査区東半分に幅広の谷状地形が伸びており、その埋土中に縄文時代および近世の遺物が包含されていた。縄文土器や石鏃・剥片などの石器のほか、大型石棒や滑車形耳飾片が出土した。

まとめ 今回の調査により、縄文時代中期後半から後期初頭頃の集落景観を描ける調査結果が得られた意義は非常に高い。設楽町域では、これまで縄文時代の遺物は多量に採集されてきたものの、当時の活動痕跡(場)を広く確認することができていなかった。単に調査事例の多い西三河地域との比較材料になるのみならず、今後行われる設楽ダム工事関連事業の調査事例とも併せて、豊川最上流域の様相を解明する基礎資料として、広く活用されるものになるであろう。

(川添和暁)

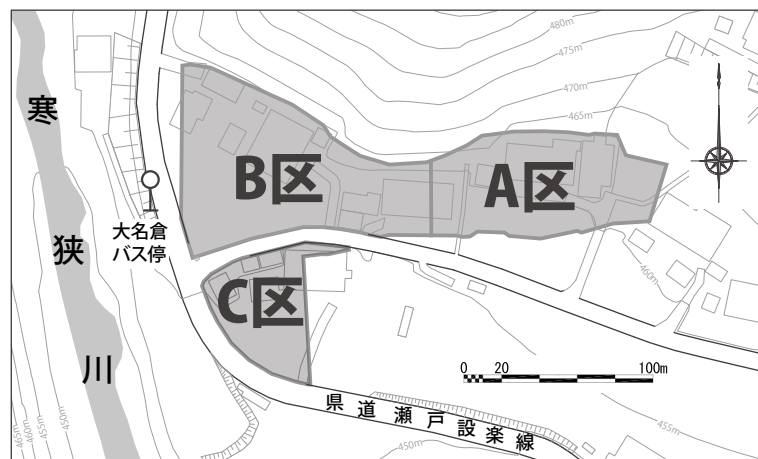
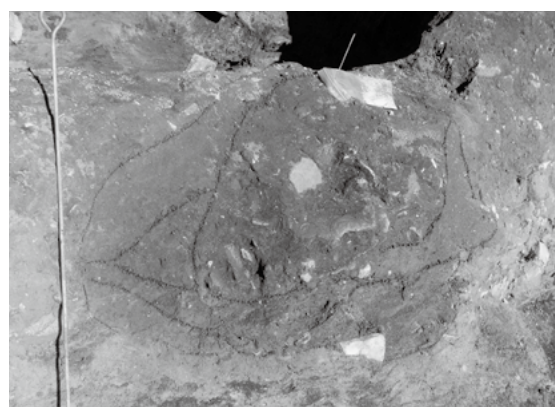
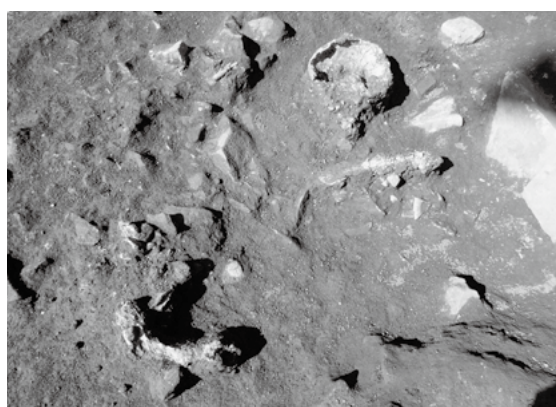
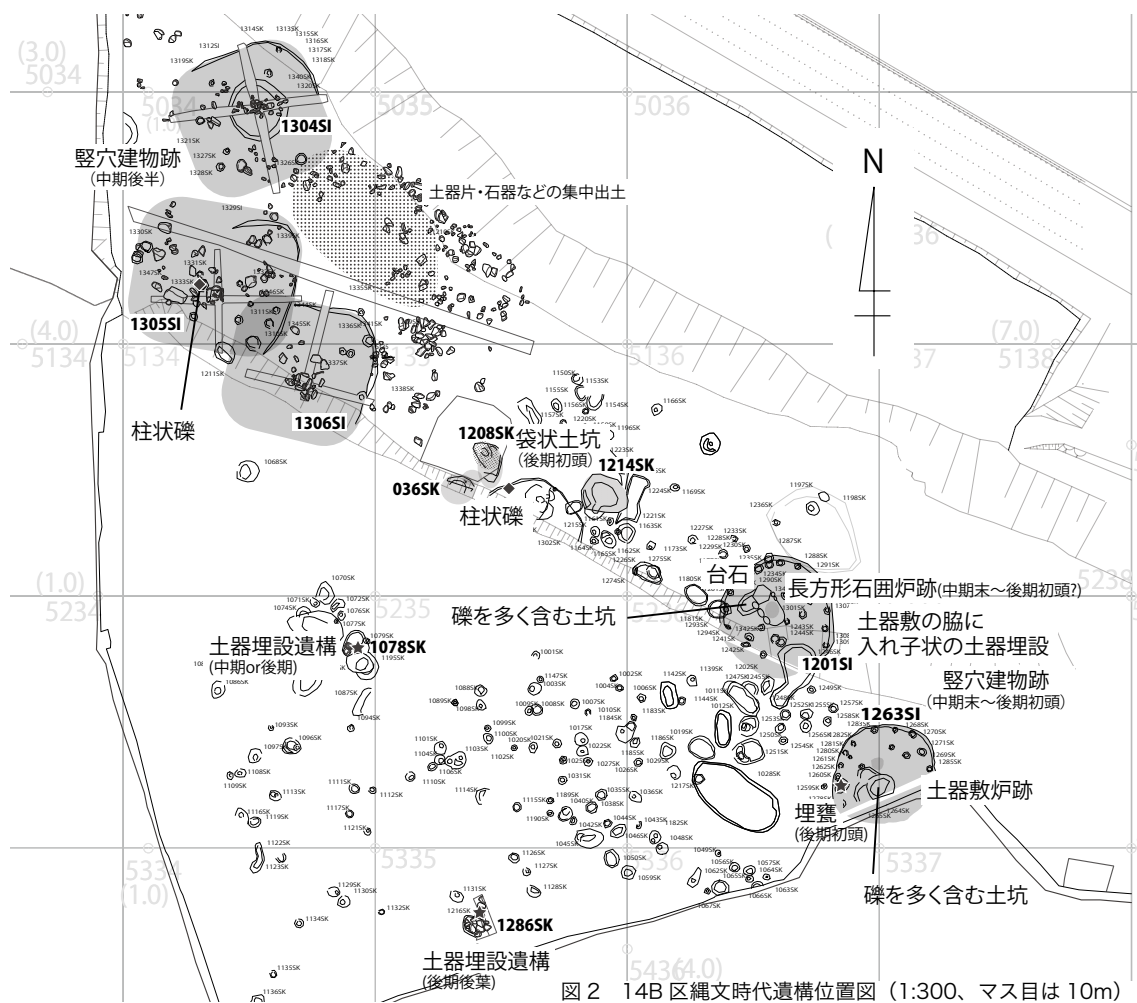


図1 調査区位置図(1:4,000)





14B 区 1304SI (南西より)



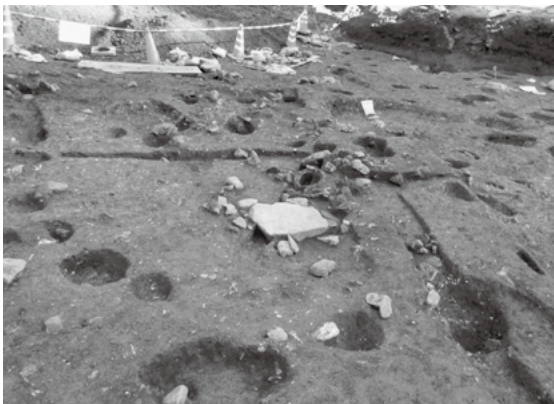
14B 区 1304SI 石囲炉跡 (北より)



14B 区 1305SI (南東より)



14B 区 1305SI 石囲炉跡 (南より)



14B 区 1201SI (北西より)



14B 区 1201SI 長方形石組炉跡 (南より)



14B 区 1263SI (南西より)



14B 区 1263SI 内埋甕 (南より)

設楽ダム工事関連遺跡範囲確認調査

大名倉遺跡

上戸神遺跡

川向萩ノ平沢遺跡

大栗遺跡

永江沢遺跡

所在地 北設楽郡設楽町大名倉字滝ノ下、同町川向字上戸神、同字萩ノ平沢、同字大栗、同町八橋字的場（北緯35度06分32秒 東経137度32分41秒、北緯35度06分49秒 東経137度33分25秒、北緯35度06分48秒 東経137度33分28秒、北緯35度06分40秒 東経137度33分51秒、北緯35度07分36秒 東経137度35分09秒）

調査理由 設楽ダム

調査期間 平成26年6月～26年7月

調査面積 150㎡

担当者 鈴木正貴

調査の経過 調査は、国土交通省中部地方整備局設楽ダム工事事務所による設楽ダム工事関連の範囲確認調査として、国土交通省から愛知県教育委員会を通じて委託を受けて行われた。今年度は5遺跡が調査対象となり平成26年6月から実施された。調査方法は各遺跡で事業用地内にかかる部分について1m×2mのテストトレンチ (T.T) を設定し、遺構や遺物の有無を確認し堆積状況などを観察した。テストトレンチの内訳は大名倉遺跡14か所 (28㎡)、上戸神遺跡15か所 (30㎡)、川向萩ノ平沢遺跡3か所 (6㎡)、大栗遺跡41か所 (82㎡)、永江沢遺跡2か所 (4㎡) である。

立地と環境 大名倉遺跡は豊川 (寒狭川) 上流右岸の河岸段丘から山麓にかけて所在し、今回は山麓斜面 (標高452m～462m) を中心に調査した。上戸神遺跡、川向萩ノ平沢遺跡および大栗遺跡は豊川支流の戸神川左岸に点在する遺跡群で河岸段丘から山麓にかけて所在する。上戸神遺跡は南東方向に細く伸びる尾根上緩斜面 (標高465m～480m)、川向萩ノ平沢遺跡は南向き緩斜面 (標高477m～489m)、大栗遺跡は河岸段丘を中心に一部が山麓斜面 (標高395m～415m) にかかる立地となっている。永江沢遺跡は豊川支流の境川左岸に所在し、今回は境川に面する河岸段丘 (標高約440m) で調査した。

調査の概要 これまで平成19・20・25年度に範囲確認調査が行われており、今回は高位の山麓斜面大名倉遺跡部で住宅地跡地や休耕田および植林帯で実施した。遺構は、北部に設定したT・T02で土坑1基が検出されたのみで、堆積状況などからみて近代以降の遺構と推定される。遺物は、北中部の休耕田地区で江戸時代後期から近代の陶磁器類が多数出土しており、中央部休耕田地区のT・T05で戦国時代に属する土器と陶器片、T・T07では室町時代の古瀬戸陶器片、T・T09では縄文時代の石器が出土した。これらの地点は、地山の状態などからみて地山をかなり削り込んで平坦面が形成されたものと推定される。縄文時代から戦国時代の遺物は別所から移動されてきたものと推定される。

上戸神遺跡 東堂神社の正面にある平坦面を中心に展開する縄文時代・平安～戦国時代の遺物散布地として周知される遺跡である。今回の調査対象範囲は東堂神社の東方にあたる。北部住宅地地区では近代以降に大規模に造成されており、遺跡は良好に残存していないと思われる。西部から南部にかけては、T・T09で方形土坑1基が確認され、鉄製品2点が出土した。またT・T13では黒褐色土から縄文土器が出土したが、これは上位から流入されたものと考えられた。今回の調査範囲では、T・T09で遺構と遺物が確認された他は、中世後期以前の遺跡が展開するとは考えにくい。

川向萩ノ平沢遺跡 県教委の詳細分布調査の結果、縄文時代と平安時代の遺物散布地として発見された遺跡で、調査対象範囲はその南端部に相当する。全ての試掘坑で黒褐色土が確認されており、

T・T03で縄文時代の石器が1点出土した。これ以外に遺構と遺物は発見されなかったことから、調査地点よりも上位で縄文時代の遺跡が展開しているものと推定される。

大栗遺跡 縄文時代・平安時代・室町～戦国時代の遺物散布地として周知される遺跡である。西部地区では土石流によるものと推察される角礫を多く含む厚い堆積が確認され、遺跡の有無は確認できなかった。T・T10で弥生時代から古墳時代の土器が1点出土した。中央部地区では、特に南半部緩斜面で黒色土が安定して堆積していることが判明し、T・T17とT・T22とT・T36で土坑などの遺構が確認され、T・T21とT・T36では縄文時代の石器が出土した。特に、T・T36では土坑から剥片石器などが出土しており、縄文時代の遺跡が良好に残存していることが確認された。一方、南部地区では、東部緩斜面部で遺物包含層となる可能性がある黒色土が確認され、江戸時代の遺物が出土している。遺構は確認されていないが、付近で調査中に縄文土器が表採されたことから、東部緩斜面部で遺跡が存在した可能性が考えられる。しかし、西部平坦面部では黒色土の堆積、戦国時代以前の遺構と遺物は確認されなかった。

永江沢遺跡 縄文時代・鎌倉～室町時代の遺物散布地として周知される遺跡である。調査の結果、T・T1とT・T2ともに厚い河川性堆積物がみられ、遺構と遺物が全く確認されなかった。上位の堆積は耕地整理の際に盛り土の可能性が考えられる。

(鈴木正貴)

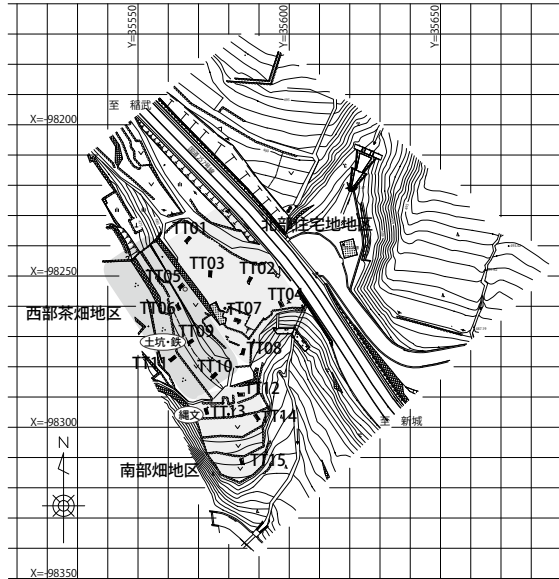


図1 範囲確認調査の遺跡位置図 (1:25,000「田口」)

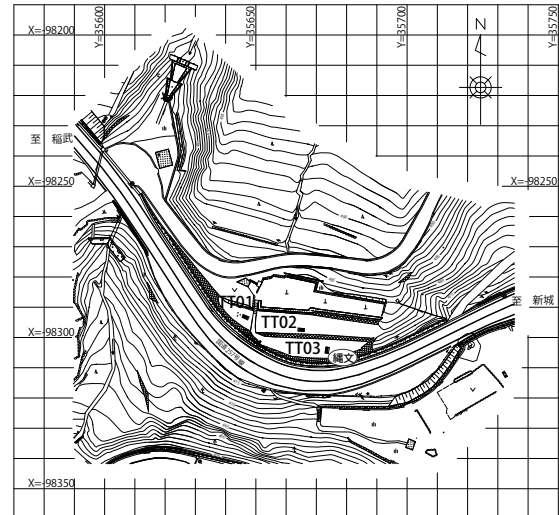
大名倉遺跡



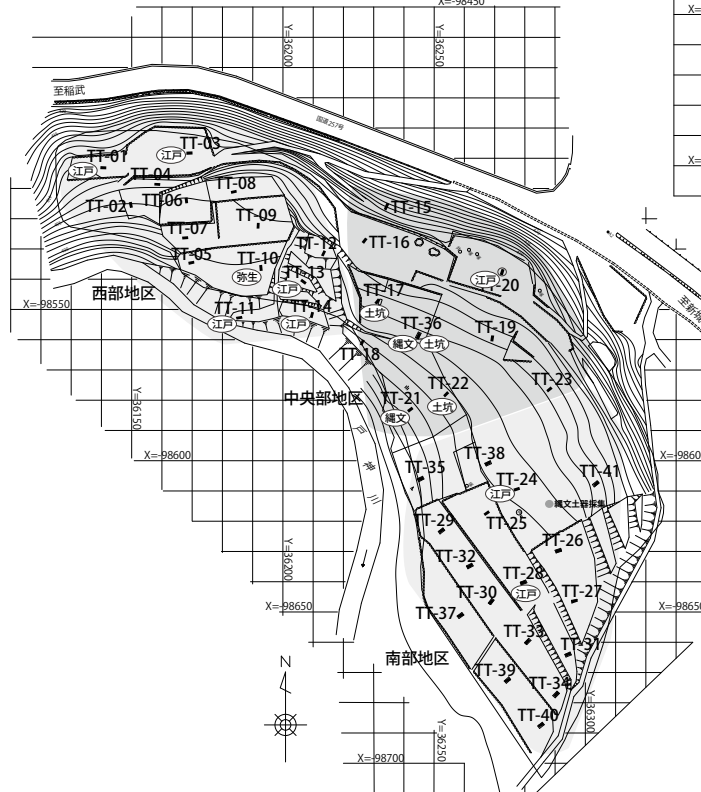
上戸神遺跡



川向萩ノ平沢遺跡



大栗遺跡



永江沢遺跡

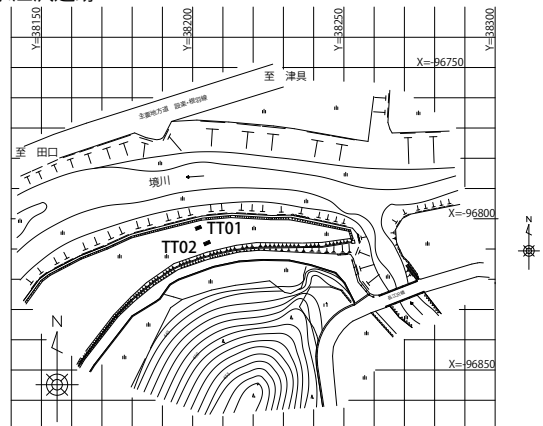


図2 範囲確認調査のトレンチ位置図 (1:2,500)